毒消し売りの生活史（3）

佐　藤　康　行

1　はじめに

アナール学派が既成の学問領域の古い壁を打ち壊し、社会学や人類学の手法を積極的に歴史学のなかに導入して「新しい歴史学」を樹立したことはつとによく知られている。「新しい歴史学」が豊かな成果を世に送り出し、人文社会科学全体に大きな影響を与えてきたことは、我々がそこから継承発展すべき視点が少なくないことを示唆している。それに関して、現時点で整理するならば、日常性を対象として取り上げる視点、時間と空間の重層的構造をとらえようとする視点、身体とこころ（心性）の独自の歴史に注目する視点、日常の人間関係を権力ないし支配の観点から読み解く視点などを指摘することができるだろう[1)]。

女性史研究においても、こんにち「新しい歴史学」の認識論を無視してもはや語ることはできない。かつて村上信彦と伊藤康子・米田千代子との間でおこなわれた第一次女性史論争[2)]があったことは周知のことであろう。そのさい、村上信彦が指摘していたように、それまでの女性史研究では普通の女性の日常生活が具体的に明らかにされてこなかったように思われる。その意味で、女性が解放に向けていかなる運動をしてきたのかといった解放史の把握も重要であるが、同時に女性が「抑圧されている」日常生活を女性の視点から解明していくことがまずは必要とされるであろう。しかしながら、それ以上に重要なことは、そうした日常生活を社会の構造と関連させて理解することである。

これまでの社会科学は顔の見える人を無視し、人々をひとつの役割の担い手ないし数値として扱うことによって「客観性」を目指してきた。それに対して、そうした方法と手を切り、「生きられた生」を通して世界を構築しようとする現象学的社会学や生活史法、そして近年は「当事者性の学問」ないし「一人称や二人称で語る科学」を主張している民際学が唱えられている[3)]。毒消し売りの研究に関しても、毒消し売りを時代ごとに区分して、その発展過程をとらえていく、そうした歴史学の伝統的方法から従来の研究はおこなわれてきた[4)]。しかしながら、毒消し売りをしてきた当事者がどのような思いでそれをおこなってきたのかという視点からそれを問題にしてみると、たちまち返答に詰まらざるをえない。毒消し売りの研究においては、当事者個人の聞き書きはわずかながらあるにはあるが、生活史法を単なる聞き書きとしてではなく、社会科学の一つの方法として用いた研究はほとんど見当たらない[5)]。その意味において、本研究はひとりの女性の生き様を単に提示するだけではなく、当事者の眼を通して日常

生活をとらえ、そこから生活の独自な論理と歴史を把握することを目指している。言い換えれば、人々に意識されていない、むしろ身体化された「ものの考え方・感じ方」や固有の価値観、社会関係の固有の性格などを日常生活のなかから把握し、「毒消し売りの社会史」を構築しようとするものである。

今回生活史を取り上げる毒消し売りの経験者は、前浜ミエさんである[6]。明治40年生まれで、調査当時88歳であった。彼女の場合、毒消し売りに息子が一緒に付いてきて金物の行商をしていたが、こうした例はたいへん珍しい。そして、必ずしも「幸せ」とはいえない人生にあって、やがて新興宗教に入っていく。そうした特異な人生を歩んできた人である。

Ⅱ　毒消し売りの生活史

＜弟のお守＞

私はね、はぁもう歳でしょう。アハハハハ。明治40年（生まれです）。

小学校へ出た時に、あのう、家（うち）はね、まあ村でもね、大きな、あの、農業、田んぼ、畑、山、そういうのをね（持っていた）。だから私は主に（弟妹の）お守が多かったんです。

そうですわねえ、私が3年生の、2年生のね、12月。一番末の子供ができたわけですわ。だからね、もうはぁ、お父さんは、まあその前に亡くなったんだから。船でね、漁場（りょうば）だから、漁師やってた。んで、亡くなって、ほいでほら、母親一人がね、もうあれやこれやとねえ。山のヒヤフ[7]だめになれば、そこへ、ほら直しに行がなきゃなんないし。田んぼはいっぱいあったしねえ。ほーんとに忙しかったんですわ。だからね、3年生になると、12月生まれた子供をおぶって学校行ったんです。

＜女の仕事＞

家族は、じいちゃんばあちゃん、皆そろってたからね。家族は多かったですよ。私は、大勢いたんだけどもね、私の生まれない前に生まれた人たちが、みんな亡くなってしまったんですって。だから、私より1年早くね、生まれた男の子がいて。ほんで私が一つ違いで。はぃ、2年生から、ほんね。赤ん坊おぶって行ぐくらいのわけだったんですの。おじいちゃんおばあちゃんいても、そんなにもうね、年寄りはそんなに重いもの。昔は今みたいに、いい、その、肥やしってのがなく、もうほとんど自分の冬内（ふゆうち）溜めたね、肥やしを今度は桶でかたんで（担いで）。みんーなここ（家が建っている場所）が穴んなってるんだから。どっちへ出る家も坂道。うん、だからねー。えぇ、そこ登って行くのがね、大変なんですよ。

きょうだい大勢いたんだけど、先の人たちがみんな死んでしまってね。だからそん時は（兄弟姉妹は）3人ですこてね。で、オジいうのが1人、アニが1人。男はお守しませんがいね。いっくら体が小ちゃくたってね、やっぱり女の方がお守しますですね。

（子供の頃は）まだ小さいからね、お守しながらは農業手伝われませんけども。お風呂の水を汲んだり、みんなね、井戸ばっかりで水道ってのはなかったからね。大きな甕に溜めとくん

ですわ。それだからね、おぶって。ちいとずつでもね、風呂にあけるのが一番辛かったね。井戸からこう汲んで、それでお風呂に溜めたり、甕ん中にね。溜めたりするのがね、一番辛かった。でも仕方がない。そりゃあねえ、自分の受け持ちだから。

(男の仕事は) あんまりね、この、一つ違いの男だけども。男ってのはあんまりね、そういうことをしないです。それが当たり前のようなわけでね。なんたって女のミナモシマエ (みだしまえ) でね。(兄は学校を) んー、しまいはね、出たけども。まぁ、高等2年は学校行ってました。

はぁ、おばあちゃんは畑の草とり、一生懸命に。うちのおじいちゃんて人はね、うちに酒売ってたんですの。だからあんまりね、山は出るけども、畑、田んぼはそう出なかったです。女の働くとこですわ、ここは。

(小学校を卒業した後は) まあほとんど子守ですね。(毒消しに出てからは、子守していた子は) おばあさんが畑へ行くにも連れて行くね。はぁ、歩くからね。

＜父親の死亡＞

はぁ、そのお父さんがね、まだ学校終わらんうちに。あのー、ほら、この、火災のね。あれでもって、消防ってのがあるでしょう。その消防のね、何だか、飲む会があったんですわ。ほんで、船の出る日だかね。ねえ、そういう会に出て、それで、船を、その、はぃ、漕ぐとこまで行けば、そんなにね、危なくないんだけども。あの出る時にね、長い竿でこう押してね、船をね。出すまでに、飲んでるから。ほら、ウフフフフ。3人落ちたわけですわ。ほんで、2人はのぼって来たけども、私のお父さんは、このね、大事な所を傷つけてしまった。

うん。それでね、すぐに、あのー、トミナガってとこにいい医者があって、そこへ行ったんだけども、2日いて亡くなったんです。それから今度ね、いっぱいの農場をね、母親一人がね、やるんで。ほんっとに小ちゃいながらもね、えーやっぱり何でもまあ手伝ってやろうと思って。

(父親の亡くなった年齢は) そうそう、45でした。私がこうがっかりしっとね、「行って顔見て来なさい」って言われてね。自分がこう行って顔見っとね、鼻から血が出 (て) るんです。

＜薬の袋詰め＞

毒消しはね、6年卒業すると、すぐに出ていくんです。でも私はその当時ね、子供のお守をしなきゃなんないし、うちのこともしなきゃなんないし。だからね、行商には行かれなかったけども。

うーん、私のおばさんが、営業をやってんですの。毒消しを機械でこしらえてね。それをね、みんな包んで、袋に詰めるでしょ。それを、私は、行きました。(薬は) まあ、このくらいの重箱にね、はかってくれるんです。それをね、夜も行ってね、一生懸命に包みました。

今はね、あの、(薬の製造は) なくなってね。今は、私のいとこが一人ね、薬剤師をしてます。キチノスケっていう所。(ほかに薬を製造している所は) ああ、スナヤマもそうらし、そいから昔のほら、あー、庄屋でしょ。大越ね、大越も、やっぱり母親の、姉さんでした。

私の母の姉が、大越の分家のね、サンゴベエって家へね、生まれたわけですの、私の母も。それで、一番姉さんは、庄屋へ嫁に行ったわけです。

<初めて毒消しに出る>

そうですね、その時はまだ幼稚園てのはないし。んだからね、今度、畑へほら、おばあさんに、草取りにね、付いて行かれるようになってから。はぁー、みんなね、行商に行ってしまってね。この村に連れがなんにもいないんですよ。それで、おばさんは、営業をやってるから、行ったり来たり、行ったり来たりしてるわけです。ほんで来てね、はぃ田んぼの草も取ったし、麦も落としたし。はぃ菜種の始末もね、したんだから、「ちょっと一緒に行がないか」って、声かけてくれたらね、友たちの方へね、行きたくなってね。エへへへへへ。

(毒消しに出るのは普通) 学校終わるとすぐですからね。だから14だから背なんてこんなもんでねーえ。へえから、正面箱にね、みんなが出て行くとからになるから、「あたしも行きたい」言ってね。

それでほら、体が小ちゃいでしょ。だから今度はおばあちゃんがね、ええかげんどこまで泣きながらついてきた。

毒消し (に行く時の駅) はやっぱり巻から乗ってって。はぁ、そこまで歩き。バスってのもないし、なんにもないからね。巻まで歩いて行って、それから長野の方ぐるーっと回ったんですわ。

(上越線は) なかったですよ。あれは、だって私たちが、はぇ大人になってからです。だから汽車に乗ってる時間が長かった。

あのう、東京行くとすぐにね、友だちについて行ったんですわ。今考えるとね、あのーほら、王子 (おおじ) って言ってね。王子、飛鳥山 (あすかやま)。はぁ、あん時はまだ飛鳥山はね、松林でした。私も友だちについて、離れたら家へ帰らんないと思ってね。一生懸命だけども、やっぱりね、買ってくれる人があれば。あー、ねえ、別々になってしまうでしょ。どうしてもね、一緒になってらんないもの。だからねーえ、「今度うちへ帰る駅に、5時までに、ここへみんな寄ってね」って、そう言って、行った時別れたんです。そして、その、「飛鳥山って言えばわかるから」って。よく聞いてみたんだけども、その飛鳥山がよく言わんなくって。「あかすかやま、あかすかやま」、「そんな所ないんですよ」って言われると悲しくなってね。それで、はぃ、泣きだしてね。商いどころのあれじゃないですけども。泣きながら。そしてね、回ってるうちに、飛鳥山へ出たんです、駅へ出たんです。あー、ここらったんだ。まだ時間が早いから、もうちっとばっかね。この、遠くへ行がないで、その付近を回ろうと思ってね。ほいで、またね、体が小ちゃいけどもね、被る笠はおっきいんです。みんな入るような大きな笠を被って、そしてあるね、料亭の前へ出たんですね。んで、そこで、「どんなでしょ」って聞いてみたらね。こっち招くんですの、「来い、来い」ってね。「(大きな笠をかぶっているので) キノコみたいの、毒消しのが来たから、みんな出て来い出て来い」って。みんなね、ほーんの旅館

の方がみんーな寄って来て。行ったばかりだからね、いくらもほら担いでないでしょ。私がこれを、私がこれを、そこでみんな買ってもらった。だからね、ほんーね行って、いっかも経たないんだけどもね。その晩は私が一番でした。ハッハッハッハッハ。

<宿>

宿とったのはね、あれは浅草。千足町（せんぞくまち）。（宿に一緒に住んでいる人は）そうですねえ、しかも多いですよ。（一緒に住んでいたのは）みんな角田の人です。だから、おやさま（庄屋の大越家）の子でも、やっぱ、みんなほら、おばさんだから。ほんに、行ってたんです。

（いつも２人で歩いた）そうそう、なるべくね、二人で。んだけども、んー、近場を歩く時は、一人でね。んー、いとこの姉さんが、そのキチノスケですけどね、一番の頭ね。東橋（あずまばし）から、その次の橋を、こう、ずっと家（うち）がありますね。そして、そこへこう行って、あの橋行ったら、あの橋を渡って、またこっちの方へと、ずーっとね。その時も、ぜんーぶ持ってったのは買ってもらって。やっぱ、あまり小ちゃいのが歩くからね。声をかける家は大抵買ってくれるんですよね。

一番小ちゃいです、行った中に。体格が良くないの。だから、小ちゃいしね、やっぱり、声をかけられると、かわいそうだなと思うんでしょう。「お前のね、親は何をしてるんだ」、なんてね、聞く人がありました。ちっちゃい子が売ってるっていうんで。うーん、角田ではもう、その、やるもんだと思ってね、出る人も、出す人も。だけど、私のおばあさんは、この、ええかげん泣きながらついて来た。

<農作業>

今までね、田んぼへ入る。あのーその、田の草を取る時にね、蛭ってのがいるんだよね。私が履くももひきがないんですの、体が小ちゃいから。それでももひき履かないでね、入ったったら、何だかチクチクチクチクするから脱いだらね、いっぱいここにくっついてるんですて、それが。んー、まあ、んーで、稲を下にしてね、じきよそへ上がる、逃げ上がったってね。アハハハ。そんな時もありました。

んー、まあ（農作業の）手伝いをもらうのは皐月（さつき）だけですね。稲植える日。その時だけは、はぁ、まあ、その、あそこらの方たちも、みんなね、えー、歩いっちゃから（毒消しに出ているので）。

（農作業は）いや、親戚じゃなくたっても、やっぱり、んー、「明日は皐月でね、あのう手伝ってもらいたいんだけども」って言えばね、みんな来てくれます。（手伝いには）声がかかればね（行く）。皐月のね、えー、手間は高いんです。（手間は）まあ、どのくらいだったかねーえ、よく覚えてはいないけども。んー、まあ、皐月だから、いくらかの御馳走もありますよね。ほんで、今度は松野尾がそういう時になると、声がかかれば行がんでいらんねからね。で、ほっと松野尾はね、角田は田んぼが遠いから、それ出来ませんけども。松野尾の方の人はね、夜は

ちゃんと夕飯の支度もして、夕飯を御馳走するんです。角田はね、田んぼとうちと離れてるからね。みんーな、お金で払ってね。夕飯の御馳走はしませんでした。(松野尾では) いや、お金やったりね。はぃお膳にちゃんと (お金を) つけときました。そういうね、お金貰う所は、まだ私たちは無理なんです。

<船乗り>

あのう、私のうちはね、大滝ってうちが本家なんですの。上 (かみ) の方にあるんです、大滝ね。んで、分家がいっぱいあります。本家のうちはね、まあ昔庄屋だから[8]。ああ、そうあんまり (私の) うちの人たちがそう行きません。(その) 本家が船出してるんです。はぃ、父親いないし。まあいなくっとも、その、捕れたものは、平等に分け合って[9]。

(お父さんが亡くなられて長男が代わりに船に乗った) そうそうそう。(長男は) 体格が良かったしね、はぁ。その分私が小ちゃいんです、ハッハッハッハ。

<八月挽き>

(毒消しに出るのは) そうねえ、17 (歳) までね。田植えは終わらんうちは出られませんでした。母親一人のね、あれ (仕事) だから。全部の手伝いしてね。麦を刈ったり、ナズナを揉んだりね、いっぱいあるんです。畑も田んぼも、いっぱい田んぼはありました。ほーんとに。だから、ずーっとあたしがいて、いくらでもならなくってもね、それでも、やっぱり役に立つんですね。

お米はね、あの、8月までね、みんな、あの、土蔵がみんなあったから。土蔵のね、あのー戸棚にね、保存しといて、ほんで「八月挽き (はちがつびき)」って言ってね。8月になって、あのう、そのう、米の皮剝きらこてね。(収穫した米は) 籾にして土蔵にね、置いて。んで、8月にね、なると、機械で挽くんです。機械でね、難儀もなかったですよ。その8月にとれたものは、全部売るんです。

そうです (周りの人も買いに来た)。田んぼのないうち、あったしね。「八月挽き」ってね、「八月挽き」できるうちは、まあいい方だったんです。

<野菜とイワシの行商>

(畑では) 麦、菜種。畑もいっぱいあったからね。サツマイモ、そうそう。はぁ、そうしなきゃお金の出る (できる) ところがないんですもの。

いや、みんなね、大体ザイの方がね、買ってくれるんです。(ザイまで売りに行くんでしょうか) どうらったかなあ。イワシはみんなねえ、ザイ売りに行ったけどもね。お米みたいなのは、あー、どうして運んだんだかねーえ、覚えていません。スイカはね、売りに行きました。

(売りに行くのは) 私の母親が、あー、売りに行くんです。それもね、あのう、竹でもっって編んだね、いいかげん深いざるに入れて。んで、肩にこうにかたんで (担いで) ね、売りに行くんですから楽じゃないです。

(天秤棒で担いで行った) はぁ、そうそうそう。だんだん、はぁね、あー、流行ってきて、

こんだリヤカーで。こうね、行くようになったけども。始めはそうやってね、かたんだったんです。

私はうちの用がいっぱいあってね。うちのことは全部私がやらなきゃなんないから、(私は)あんまり、そういう売るには行きませんでした。やっぱり子供の世話をしたり、まだ一人遊びさせらんないからね。まあ、それが出来るまで(子守した)。

ああ、学校おぶって行ってね。それで体が小さいからね、後ろにならなきゃなんないんだけども、一番先生は前にしてくれて。教壇をね、つたえ歩きして。先生も半分ね、お守をしてくれました。

(子守は)まあ、みんなってわけじゃなくね。あのー、うちに手のある方は、学校は、ぶて行がなかったけどね。うちあたりはみんなね、んー、はぃ、おばあさん、おじいさん、はぃ、年取ったったからね。どうしても、ぶて行がなきゃなんなかった。

だから、一番末がね、あのー、男だったんですわ。あのう、私のおばあさん、おじいさん、一番末が男、私の父親が男で、あとなかみんな女でね。みんなあちこち嫁に行っているんです。

(祖母は)いーや、ほとんど農業でしたね。とてもそういう所(毒消し売り)へ行ぐ、あれ(暇)はなかったです。いっぱい畑、田んぼがあって、はぁ。(母も毒消し売りに)行かなかったですね。今度は私もいなければほら、私だってねえ、いくらも出来ないんだけどね。それでも。

<小遣い>

(毒消しから戻るのは)大抵ね、10月の初めがね、お祭りなんです。そのお祭りまでに、みんな帰って来ることになってました。(行く時は)大抵ね、団体でね。だからね、初め行かんない時は、こんだ連れがないから、寂しくなってねえ。2年目から、あー、そういって、17の時まで、(17の)うちに、農業手伝ってから行ったんです。17になった時に、初めてみんなとね、行かれるようになって。

売上は全部、親方に。帰って来てからね。帰って来てから、私たちには渡しません。みんな親にね、渡したんです。

いや、そらあ、なくてならない時はね、言えばくれました。はぁ、滅多に言わなかった。もううちはね、もう、何かねーえ。お米やなんかは豊富にあっても、お金ってのはなかなかねえ(ない)、そう入らないから。だからもう、お金のあれ(小遣い)は、自分でこんだほら、毒消し包みに行くでしょう。そうすると一升ね、包めばいくらってね、それ(お金)は私が貰われるんです。家帰って来ればね、すぐに、そこへ行がなきゃ。(毒消しに行くようになってからも)やってました。

独り立ちになるのはね、もう22ぐらいだったろうかね。(親方には)大勢いたんですよ、弟子が。他の(弟子の)方もね。

(親方が)自分でなして(していて)、ほんで、うちへ来てから、母親にね、その年の働きをね、やっていました。

（小遣いは）どのくらいっていったって、入り用なければね、言えばくれるから。なんね、自分でそんなにね、えー、とっておかなくたってもいいです。

＜結婚生活＞

結婚したのは、24ぐらいだったかと思いますけどね。それまでずっと角田にいたんですもん。商いから帰って来ると角田にいて。んで、毒消し包んだり、あれやこれやとね、用がいっぱいあるから。

（結婚のさいには）はぁ、またね、そういう好きな人ってのは、出来ませんでした。（カケは）んー、あー、はぃ24、5になればね、カケ[10]なんか言ってられません。

（嫁いだ先は）何人家族じゃなくて、ただね、あー、この村の人じゃなかったから、私と二人っきり。あのね、仙台の人でした。仙台の人。あの、ほら、横須賀にね、海軍がいたったでしょ。んで、海軍に、あのー、もう艦隊が入るっていうとね、もう何か月か前からね、魚をみんなね、大きな、ほんね、そう言えば、ここの前の家の倍もあるようなね。えー、倉庫、倉庫って言えば冷凍。そういうのをね、えー、なして。んで、私たちがいる所は、そこの親方のね、事務所としてそのすぐ前と、建ってたったんです。で、新しい家でね。それから行商やめました。はぁ、この終戦までね。終戦になっては、はぇなんもほら、海軍の用がないから、もう引き上げて。

＜仙台での暮らし＞

そうすれば（角田に帰れば）良かったんだけども。んー、反対されて、仙台へ行きました。仙台へ行って、女の子、おっきな子は横須賀にいた時にね、下んのは仙台行ってから（生まれた）。随分苦労しましたよ。

（仙台での仕事は）手に職がないもの。ほんとに、赤ちゃんは寝しといて、上の子供をおぶって。んで、このくらいのね、マカゴに。一つまあ10銭ぐらいのね、そういう品物を、なして。家の隣から売り歩きました。イワシをほら、こう、編んで。一連（いちれん）、二連（にれん）てね。ああいうね、やっぱ魚売りをね、商いましたよ。

そうですねえ、仙台に、4、5年いたったでしょうかね。私たちがいる時はね、（空襲で）焼けなかったです。とってもね、仙台にいたんではね、こらとってもやってがんないと思って、それで角田へ来たんですの。角田へ来れば、自分の身寄りもね、あるし。角田へ来てからはね、今一番末の子が、お腹にいる時に。この付近の近くをね、まだ子供がいるんだから……。みんなでね、7人いるんですよ、7人、うん。

＜長男の就職＞

だからね、（夫は）気の短ーい人でね。相手（に）はね、随分苦労しましたよ。ほんっとにね、苦労しましたよ。だから今一番末の子がここにいるんですけど。長男はね、みーんな頭の出来る子でね。あのー、ほら、皇居のね、あの、巡査の学校も出たんです。皇居の学校へね。それで、学校は、その、受かってるんですけども、なかなかそのね、採用のあれが来ないんですの。んで、私がこう、あんまり遠くへ行がないで、この近くのザイをね、商いして。ほんで、10

日もね、いれば家へ一旦帰って来て。ほんで、なんだかあのう、そういう噂を聞いたからね、なしたけども。

どのくらいたったってね、あの、採用の、ハンコを押してくれないんですの、ここの巡査が。それで、どういうわけだかと思ってね、私は今度、東京へ出て行ったんですの。ほんで九段坂のあこ（あそこ）からね、あのー、橋が架かってる、そら、門もなんにもないんですわ。だから、九段坂から入って行ったらね、交番に若い男が一人ね、立ってました。んで、私が聞いたらね、んー、なかなかね。どうしたって、同級らったんだって。んで、受かってるわけだのにね、なーんだって来ない。不思議がってるんですよね。ほうしたところがね、その巡査に、うちのお父さんが（お酒を）一升持って行けば、ハンコを押してくれたんだそうです。随分の巡査らと思いましたね。

とうとうね、行きませんでした。ほんにね、頭のいい子でねえ、絵をかけば上手らしね。もったいなかったけどね。大阪に今度はね、あのう、なんかね、名古屋の方にね、仕事があるんで。それ30人ぐらいね、なして行った時に、あの、台風に遭ったんです。名古屋台風[11]って、あったでしょ。それでね、30人ぐらいのね、頭（かしら）になって行ったんだけどもね、みんなバラバラになってしまったんですって。それで、自分はうちへ帰りたくないし。うーん、（名古屋から）大阪へ行ったんですね。んで、大阪でね、縁があって。んで、大阪に、あのう、まあ、所帯を持ったわけですね。

＜角田での生活＞

（疎開で戻って来ても）なんだから、自分の家にいらんないからね。（実家から分与されたものは）うーん、何もかにも、覚えていないのもありますからね。だからね、実家の、あのーほら、作業小屋らこてね。そこを、みんなはぃ、あのーほら、まあ、私の母親ももう、みんなが、はぃ、死んでしまったし。で、半分、はぇ、こっちの北側の方は、崩れたとこね、そこを直して。で、越前浜にそういうね、あのう、直す人がいるんですよ。それで、私が話したらね、あー、はぇ漁師はないんだものね。「どこをやめても行がなきゃなんな」言っててね。4、5人連れて来てくれて、たちまちに直してくれてね。で、柱や梁やらみんな新しく入れて、そしてそこにそうですね、何人ぐらいいたろね。今度は私の親もいないし、嫁さん夫婦でしょう。で、私の兄がまたね、ほんーとにねえ、もう、飲むともう飲まれてしまう方でね。嫁さんもせつなかったでしょうけどもね、随分と辛い思いしました。それで、今度、村のね、この土地を貸すって聞いて、へえからこの土地を借りて、ほんでね、その時もう、はぃ今一番末の、ここにいる子供がお腹にいたんですよね。それで、これをね、産んで育てるまでにはね、今度この家の借金が大変なんですわ。だからね、生まれるまでに、一生懸命にこの近在を回って。今一番末の子ができたわけです。

＜新潟県内の行商＞

（売ったのは）毒消しらったよ。毒消し。長岡の方へ行ったり、それから新発田の方へ行っ

たり、あそこのザイ方（かた）ね、はぁ。ほんとに、ずして（ずるして）うちにいることが出来なかった。

はぁ、そういう遠い所（東京や茨城などに）はもうね、行ってらんなかった。子供が小ちゃいのがいるから。(子供が大きくなったら) うちに置いて。今度は女の子だったから、大きくなってるからね。うちのことはしてくれます、子守したり。

んーん、やっぱね、農家に泊めて貰ったり。調子が良ければ、帰って来られるけども、やっぱりそれではね。商売がなかなかね、思うように行かないですからね。んでまた、みんな人が良くってね、「あの、今夜泊めて下さいませんか」って言えばね、「あー、泊まんなさい、泊まんなさい」ってねえ。ほんーね、楽でした。(宿の御礼は) はぁ、お金取らないです。んー、何か欲しい物をね。いろいろ持ってるから、そういうのを置いてね。やっぱね、五日ぐらいも回ればね、帰って来なきゃならない。

(薬を仕入ていたのは) キチノスケも大越も、おばさんのうちだからね、わがままもきくし、うん。そうそう、まだね、青木てやらね、大越の分家だってやらね、ありましたけども。大越とキチノスケだけがね、私のほんとの、フフフフ。

(その頃は30歳を) もう、越してました。はぃ幾年もね。はぁ、仙台から帰って来た時はもうね、相当の年ですわ。(いくつまで売って歩いたのか) どうだかねえ。なんだかもうね、めちゃくちゃなんですよ。ハッハッハッハ。

今度、末の子もほら、会社へ入るようになったしね。うーん、はぃ女の子も、近くへみんな縁があってね、嫁に貰ってもらったしね。はぃ、そうしてるうちに、私の相手も、体が弱ってきてね。ブラブラしてんだけども、体が弱ってきてね。亡くなったんですよ。(夫が死亡した年齢は) そうですね、もう50、60ぐらいだったろっかね。(夫が亡くなってからは) はぃ、(行商は) もうやめました、はぁ。

こんだ、へぇ末の子も、あのう、いい会社へ入ってね。んー、まあ、やでも私が出なけりゃ食べていがんないっていう状態じゃなかったからねえ、もうやめました。

はぁ。あのーほらね。あー、あそこに一軒うち建ったんですの。吉田（町）、吉田にね。うん、ここ建てない時にね。いや、吉田（に家を）建てる前に、ここ建ったんだ。ここ建って、んで、吉田が建って。あの末の子はね、吉田に勤めるから、そう思ってね、なしたんだけども。あー、なんだかね、機械のね、学校行ったんだからね。機械の方へ入ればいかったんどもね、検査役の方へ、回されたんですって。そしたらね、東京の本社へね、あの、やられるようになったんです。その時もそろそろもうね、嫁さんももろわんばならなんだしね。だけども、東京が嫌で、ここ来たんだからね。ほんであれ、7年ぐらいいたったかな。向こうの本社の方にね。だけどもその会社を辞めて、今は燕工場へ出てるんです。機械の方へね。ほんで今度、あー、吉田の方は、売ってくれって人があって、そこの人に渡してね、そうせば、ここにね。

＜水戸での行商＞

水戸のザイ、はぃ、んーん、もうみんな子供大きくなってから（行商に出た）。ここ（角田）がね、大雪でね、もう歩かんなかったんですの。雪がたくさん降って。それでね、向こうの方はそういう雪はないんですね。だけども、朝はね、あの、あれや、朝早くね、ほら、んー、皆凍ってるでしょう。あれがおっかなくってね。下が畑で、上の方にみんな家（うち）建ってるんですわね、向こうの方は。はぁ、あれおっかなかったですよ。滑るんだもん。

はぁ。水戸の太田（おおた）って所に。何にも知らないとこ行ってねーえ。うーん、ここへ来て、はぇ何年も経ってからですよ。茨城行ったのはね。茨城またあったかいとこですね。

（水戸ばかり行った）そうそう。はぁ、みんなほら、いっぺん買えばお得意になってね。みんなねーえ、何年か行きましたよ。

（持って行ったものは）はぁ、いーえ、やっぱり金物とか、やっぱ薬。（新発田や長岡でも）大体同じですわ。金物っていうより、鎌か。長男が亡くなると、三条へね、来て。ほんで通ってくれるんですよ。その時はまだ長男もね、ほんね一生懸命助けてくれてね。

それと油やらクリームやら。今井さん行けば、何でもある。衣類は売りません。（乾物は）持って行かない。

（毒消しにでかけるのは）何月頃ったってねーえ、そうね、秋祭りが10月だからね、あー、そのくらいの時に、出かけて行ぐんです。ほんで、正月までね、歩いて、しかも行きましたよ、何年も。まあ、あそこをやめてから、まあ、何年も経ちます。

水戸の方へは、長かったわねえ。だから黄門さんのうちを見たり、墓場をね、見に行ったり、はぁ。またね、泊めてくれる家（うち）はね、いいうちなんですて。それで私がね、「黄門様の墓をね、見たい」って言ったらね、辺りの人がみんーながね、一日休んでくれてね。私の連れになってくれて、フフフフ。ほしたらね、遠くから来た人があったらね、この帳面に住所と氏名を書いてくれっていってね、門が建ってるんですよ。瑞竜山（ずいろうざん）っててね、いい山ですよ、黄門様の。それを見たのがお土産です。アッハッハッハ。

＜水戸の宿＞

（水戸での宿は）一軒に決めて、はぁ。一軒で、家族とおんなじに。（支払いはお金ではないけれど）やっぱしね、むこうに損をかけないようにやって来ました。忙しい場合は田圃の仕事もね、手伝ったり。

（宿の人が角田に遊びには）来ませんでしたね。「いっぺん行ってみたい、みたい」って、言っていたからね。「来てみなさいよ」って言ったけどもね。なかなかやっぱり、一人じゃねーえ、なんだか佐渡へ来たような話もあるけども。うちへは寄らなかった。

だから何かね、品物を送る時には、そこのうちへと送るからね、ほんーに楽でした。ほんとにね、やっぱり、あー、ね、まあ、どこ行ってもね、良くして貰いました。

（毒消しをやめたのは何歳かは）あれ忘れたれね、ハッハッハッハッハ。そうですね。今こ

こにいる人（末の子）が、いくつになったのかな。へえ40いくつでしょ。だからその子が生まれてからやめたんです。

またいい方たちばっかりでね。自分のうち行ったか帰ったみたいな気持ちでね、うん。

＜長男と一緒に歩く＞

その売ってる時に、私はなんだかね、体の調子が悪くって。んで、巻の医者行ったけども、どうも。ほんで、新潟の大学へね、行ったら。「バセドー病」ってね、言われて。それから薬いっぱい貰ってね、その薬を持って行って。ほんで、具合がどんなだってねね、先生もちゃんとね、私に手紙をくれる。私もこういう具合で、ああいう具合でってね、手紙を大学へ出して、また、うん。そうしたらね、一度、1か月ぐらい経つと、「一度見たいからね、帰られたら帰って来てくれ」ってねえ、手紙が来たこともありました。いい先生でしたわねえ。

長男は私について行ったんだ。随分難儀しました。歯がないから聞きにくいでしょう。（長男と一緒に歩かれたのは体が悪いため）そうです。長男はね、しかも行きましたよ（長く一緒に歩いた）。10年ぐらい行ったんだな。一番末っ子が生まれてから、もう商いやめました。そうですね。早いものですて。いつの間にかねーえ、88の祝いをね、秋やっていただきました。

＜東京の宿＞

はぁ、それまでは、自分でお金持ってるのは危険だから、お金が貯まれば、問屋へと出すようにね、うん。吉田の今井さんってうちあるでしょ。あの今井さんも、東京に寮あって、そこにそうね、2、3年世話になりました。

そのね、下にね、みんな、あれがあるんですよ、商品が。2階に、私たちがお世話になってる。お金はなるたけ持っていないように。うん、貯まれば、もうお店へ入れてしまえば、ちゃんと、はぃ、付けとくからね、心配がない。

（薬を買う時は）んーん、現金でない、ねんだけども。自分で持ってるのは嫌だから、貯まれば入れる。（キチノスケや庄屋でもそういうことは）出来ました。だから、おばあさんたちが行ってるんだから。ほんでこっちへ来たり、行ったり来たりして。はぁ、その方が安心でした。

（元払いの日でも返さなくてもいいようになってる）そうです、かえって貰う方が、ハッハッハ。そうそう、「今日は元払いの日だ」、なんてね、言ってたったけども。私が始まってからね、そういうことはなかったです。

＜宿の生活＞

（宿には）しかもね、大勢で。大勢ね、いるのですから、面白かったがね。フッフッフッフ。まあ今日あったことのね、面白い所を話し合って。だからね、うちにいて、年中自分の相手に怒られてるよりも、よっぽど良かった。

この時もね、水戸へちょこんちょこんと行って、うん。（でも）東京は、歩きました。東京は、どこも行かん所ありません。寮はね、下谷（したや）でした、下谷。夜帰れば、みんな一緒に

なるでしょう。だから、いろんな、あった時の話をしたり、うん。うちにいるよりよっぽどいかったです。

東京にも用があるから、東京に用のある時に東京に行って。自分の好きなものばかりなにして、今度送って、送ったり、かぶい（担い）たりして。水戸に帰ってます。

（毒消しの稼ぎがいいと聞きますが）アッハッハッハ。まあそう、そのおかげでこのうちが出来たんだからね。

（最初は長岡とか新発田を歩かれて、その後、水戸とか東京を歩いた）そうです。雪がいっぱい降らない時はね。あのー、長岡方面ね、行ったり。十日町の方へ行ったりして。雪が降ってから、茨城の方へね。はぃ、もう水戸へ行ぐようになってからね、東京はあまり行ぎませんでした。水戸も長かったねえ。（長男と一緒だから）ツレはない。

んだからね、皇居の巡査に、学校へ出たんだろもね、だから（お酒を）一升持って行けば、言わずも、ちゃんとおさまってられるんだ。私に似ないでね、頭の出来いい男でした。ほんーのもったいなかったわ。

＜長男の死＞

長男は、なんだか大阪に、嫁さん貰ったんね。うん、同じ会社へ出った人をね。長男の相手ですか、大阪にいたんです。そのね、長男の相手も、会社の上役の方（うわやくのほう）でね、勤めてたんです。子供があるようになってからね、もう、はぃ、こっちへ来ないから商いはしません、長男はね。

だからね、自転車でね、（会社の）あの役この役っていろいろな役をやっていたもんでね。遠くへ行ぐ時は車でね、行ぐんだけども。近間に用があって、自転車でちょこんと出て行って。それで、不案内のね、あのう、車が一台入っててね。あのう、ほれ、交通止めしてあって。それが、行ってもいいってことになったから、うちんのが自転車に乗って、近所に用があってね、出かけて行ぐがんに。そのトラックが、不案内だったんですと。それで、その、巻き込まれたんですわね。頭巻き込まれたから、たまったもんじゃない。まあ、ぐもすもなくね、死んでしまった。

亡くなってから。そうそう、はぃ何年も経ちますね。じいちゃんたちはもっと早くね、亡くなったし。なんだって（末の）子供が嫁さん貰ってから。

＜つれあい＞

私の相手。なんーもしないでね、床屋に寄って将棋したり、そういうね、ことばっかりしったったんだそうです。子供はほら、保育所が出来て、保育所へ送って行げば、はぇ、ほら、あれでしょ（世話して貰える）。だから、どっちかって言うと、怠けもん（者）だったんらこてね。死んだ仏にね、言って、ちょっと悪いけども。ほんとにそういう……。

（夫は）ほとんどね（働かなかった）。これというあれは。ただ、海軍に魚を納める、手に職ってのがないんだもん、はぁ。そこに勤めてる時（海軍に魚を卸していた時）はね、責任がある

から、真面目にね、やってたけども。ここへ来てからは、私がほんとに、跳ね回って歩くからねえ。

酒も一口飲む人じゃなかったです。(亡くなって) そうね、去年が十三年忌らったからね。(釣りは) そういうのは、まあ、好きじゃなかったね。将棋やったり、そういうのをね。へぇから麻雀。友だちったってね、ほんとに親しい友だちってのは、滅多にうちへ来なかったからねぇ。

今ね、ここにいる子もね、うーん、燕の高校へ出て、それから東京へ行ってからね。今度、うーんと、んー、飛鳥山の王子の上にね、なーしたって、ほれね、思い付かんかんだいね。出そうで出ねんだわね。はぃ年を取るとね。

＜創価学会に入る＞

(毒消しに出る前や帰った後に村の神社にお参りすることは) まあ、世間のね、のには、あまり干渉しないで、自分は自分の生涯に励んでました。(だから、熊野神社や弥彦神社には) あんまりお参りしません。若い時はね、お参りしましたけども。今はね、今度、別な方 (ほう)。池田先生って方わかりますか。(創価学会に入ったのは) 10年以上は経つわね。

んー、東京にいるうちに (創価学会に) 入ったね、私は。(子供が入られて、それでおばあさんも入った) そう、大阪がね。(他の子供たちは) 嫁に出てるのはね、なかなか、昔からのがあるからね。出来ない人もいるけども、大抵やってます。(末の子は) はぃー、私より前に入りました。学生の時からね。長男は一番早いけどもね、なんだって大阪とここだから。うちに今いるのはね、燕の高校行ったんだけど、だからねーえ、燕の先生に言ったんですって。ほしたらね、「そうかやってるな、うん俺もそのうちにやるわ」って。フッフッフッフ。その学校でもってね、学校に出てるうちに。はぃね、あのう、行ってました。

大阪も (長男も)、早くね、やってました。だから今ね、何か、会議のある時は、うちが拠点ですわ。越前浜からね、松山から、松野尾から、みんなうちへやって来ます。

また、あの方のね、池田先生のゴシュユのね。ほんとに、うん。んだからね、本だけは、今病院に行ってても、寝てる時間は、あの、本 (聖教新聞が発行している「大白蓮華」) を見てます。寝てて読んでるんだから、あんま疲れません。今、世界ですね (世界に広がっている)。

私は、そん時は分からないから。ちゃーんとね、昔から決まってるお寺があるでしょう。だから言ったらね、「親孝行さしてくれー、親孝行さしてくれー」ってね、私に頭下げました。そん時、私はまだ分からない。やってみて初めてね、「ははあ、そうだったのか」ってねね。今はやってます。みんーなでやってます。

やっぱ「親孝行やって、やる」って言って頭下げてね。なしたけども、早く死んでしまってね。なんも親孝行ねえかった。フッフッフッフ。

(連れ合いの人は創価学会が) 大っ嫌いでした。ハッハッハ。(そういう意味では、) やっぱりね (家族がうまくいかなかった)。だけど亡くなる時はね、楽しそうに亡くなりましたよ。

今はこんだね、同志葬（どうしそう）だから、お坊さんは必要がありません。今日もね、巻にあったんだけどね。あのう、ほら、会館が出来てるから、そこでね。

Ⅲ 考　察

表現の仕方こそがまずもって「ものの考え方」や「感じ方」を伝える表現手段である。そこで、まず前浜ミエさんの話し方から取り上げてみることにしたい。前浜ミエさんの話し方には、言うならば、「語りのレトリック」とでも言うべきものが窺われる。

前浜さんの場合、控えめな話し方が印象的である。特に、宗教のことに関しては、「別のほう」とか「池田先生」と言って、直接教団名を出していない。これは、宗教という性質上、比較的ありうることであろう。しかし、宗教以外のことでも、たとえばつれあいが大酒飲みであることを「酒も一口飲む人じゃあなかったです」と述べている。また、これまで取り上げてきた毒消し得りの人々は、毒消し得りをしてきてよかったと述懐していたが、前浜さんは直接そう言わず、「どこに行ってもね、良くして貰いました」と控えめな表現をしている。ほかの村人は、前浜さんのことをとても「上品な話し方をする」と言っているように、こうした控えめな話し方は必ずしもほかの毒消し売りの人々には見られない。言葉使いが環境に規定されて形成されていることを考えると、彼女が角田を出て横須賀、仙台と住んでいたことが影響しているのかも知れない。

一般的に、話者が対話を通して語っていることもあり、主語や述部の省略は比較的よくあることである。にもかかわらず、前浜さんの場合、特に文章の最後の言葉、つまり述部が省略されることが多いように思われる。一例を上げると、「年寄りはそんなに重いもの……」と言ったり、「桶でかたんで……」と言って述部を省略している。こうした表現の仕方は、述部を省略しても文脈で意味が分かる場合には、述部を省略しても構わないからであると言える。しかし、なかには必ずしもそうとは言えず、自分の思いを心にとどめておいて、言葉に表わしたくない、そうした言語表現の場合もある。前浜さんの場合は、この後者の話し方が比較的多いように思われる。「酒も一口飲む人じゃあなかったです」という例ひとつを取ってみても、その言葉使いのなかに言外の意味が含まれていることを窺い知ることができる。

そのほかに、彼女はある話題に突然戻ることがあった。それは、長男の就職のことやつれあいのことでずいぶん苦労した話題であるが、これらの出来事がいかに母親本人にとってもきわめて重大であったのかを物語っている。また、「あれ」とか「なして」といった言葉は、前浜さんだけでなく、これまで取り上げた人々にも多用されている。「あれ」という指示語は、多くの人が普段用いているし、「なして」という言い方は方言であるが、述部を省略するさいに多用されている。そのほか、本人や村の人々に確認したところでは、ヒヤフやミナモシマエなどの表現は前浜さん個人の造語のようである。どうして個人的に造語したのか知りえなかったが、この点はほかの人には見られなかった。

それから、これは前浜さんに限らないことであるが、相手が直接話しているように話す話し方、つまり直接話法で述べることが多いことは聞き取りをしたおばあさんたちに共通して指摘できる。たとえば、「キノコみたいの、毒消しのが来たから、みんな出て来い出て来い」と相手の立場に立って語っている。こうした直接話法は、これまで取り上げてきた篠田さんや加藤さんも多用しており、これまで聞き取りしてきた人々に共通している。この語り方は、学歴を積んだエリートにはあまり見られないものであり、学校教育をあまり受けていない人々の話し方の特徴であるが、こうした話し方は三人称の話し方ではなく、一人称の話し方である。このように、普通の人々が間接話法や三人称を多用せずに、直接話法や一人称の話し方をしてきたことは注目されてよいだろう。

そして、何よりも注目されることは、過去の認識、もしくは時間の認識が本人もしくは身近な人（たとえば子供たち）の人生に即して考えられていることがあげられる。たとえば、何歳で毒消し売りをやめたかが思い出せず、末の子が生まれたのより後だという具合に応えている。こうした記憶方法は時間認識の方法として多用されている。こうしたことは、出来事の時期を西暦や昭和では覚えていないということを示唆している。このことから、西暦や昭和といった客観的な時代区分は、個人の人生にとっては何の意味も持っていないことが知られる。それに代わって、彼女の場合は、自分の人生のなかで重大な出来事、たとえば子供たちの出生などが主として過去を認識する尺度を構成している。こうした時間認識の方法に関しては、彼女に限らずこれまで聞き取りをおこなってきた多くの人々に共通しているが、どちらかというと男よりも女の人のほうが多く見られたように思う。それは、女子よりも男子のほうが学校教育をより修めているという時代状況の問題もさることながら、こうした男女間の差異の背景には、近代の家制度によって形成された「男は外の仕事、女は家事」という性別役割分業があり、「ものの考え方・感じ方」が社会的・文化的に形成されたものであることを示唆している。

さて、次に、毒消し売りの行商を中心として前浜ミエさんの人生についての考察に移ることにする。まず、彼女の生まれ育ちから見てみてみよう。彼女は実家が田畑を持っている裕福な家であったことを述べている。そうした裕福な家に生まれたにもかかわらず、彼女は必ずしも「幸福な」結婚生活を送ることができなかった。その背景には何があったのだろうか。その背景には、小さい時に父親を亡くしていること、村内で結婚せずに村外の遠くの人と結婚して横須賀に移住したこと、夫が酒飲みで働かなかったことなどの複合的な要因が原因であると考えられる。父親が死亡したのは、彼女が小学生の時であった。父親は漁師でをしていたが、船から落ちた時の打ち所が悪く、それが原因で亡くなっている。そして、父親が乗組員（カコ）として乗っていた本家の漁船に、長男が父親の跡を継いで乗ることになった。父親が小さい頃に亡くなり、家を維持していく大黒柱を失ったことが、のちの人生に大きな影響を与えることになったように思う。

彼女の子供の頃の仕事は、兄弟姉妹のなかで唯一女性であったということもあり、小さい時

から末の子の子守をした。小学校にも弟を背負って行ったが、先生が半分子守してくれたと述懐している。学校で子守をする光景は、この当時どこにでも見られたのである[12]。子守のほか、井戸から風呂の水を汲んできて甕に運んでいたが、この水汲みが「自分の受け持ち」であり、とても辛い仕事であったと言う。この話しは、この当時の子供たちが家事の一部を「自分の受け持ち」として受けとめていたことを教えてくれる。さらに、女の子供たちは小学校を中退して働きに出たり、あるいは就学中に兄弟姉妹の子守をしている。前浜さんの場合、田畑が多いこともあって小学校を卒業後すぐに毎消し売りに行くことができずに、家に残って畑の仕事を手伝っていた。祖母は畑仕事、祖父は酒屋の仕事をしている。祖父母が重い物を運べないため、彼女は小さい時から坂道を重い肥やしを担いで運んだり、田畑の仕事を手伝ってきたのである。畑では麦やナズナ、菜種、サツマイモなどを作っていたが、これらはこのあたり一帯でよく作られていたものである。そうして、弟子の時には親方から父親にお金が渡され、本人は貰えなかったのである。小遣いが必要ということもなかったと述懐しているが、こうした事情は子供たちが家のために働いていたことを物語っている。こうした事実は、この時代には小学校が義務教育化されていたにもかかわらず、小学校の義務教育制度が社会的に完成していないために、いまのように子供が家のなかで子供として遇されていないこと、すなわち子供が小さな大人として遇されていて、子供期がないことを物語っている。

また、前浜さんが家のことは全部しなければならなかったと言っているが、これは「男は外の仕事、女は家事」という性別役割分業を具体的に語ったものである。漁家では、男は海の仕事に専ら従事したので、女が陸の仕事一切をしなければならなかった。前浜さんの家でも、以前取り上げた篠田さんの家と同様に、母親がイワシや野菜などの行商をしており、そうした行商は男の仕事ではなく、女の仕事とされていたことが窺われる。このように、女性がイワシや塩、野菜などを近郷を中心にして行商していた姿は、なにも明治以降になって始められたわけではなく、近世中期には既に見られたことである[13]。こうした事実から、農家や漁家は生産活動と同時に、流通や販売の活動をも担っており、農家や漁家がいまのように生産のみに従事するようになったのは決して昔からのことではないこと、および女性がそうした流通・販売に関わっていたことが知られる。そして、さらに毎消し売りは女の仕事と決まっていた。毎消し売りに女が出るのは「あたりまえ」であった。彼女はそのことについて、「角田ではもう、その、やるもんだと思ってね、出る人も、出す人も」と述べている。この「あたりまえ」である意識は、当時出なければ一人前と認められなかったことに関わっている。

毎消し売りは歴史的には始め男がおこなっていたものであったが、塩業の衰退に伴って女の行商として定着していったことは既に指摘されているところである[14]。しかしながら、塩業の衰退は比較的どこの漁村でも見られたし、ほかの村でも毎消しを売っていた所があることを考えると、小村弌の言うように、塩業の衰退だけが毎消し売りの行商に出た原因であるとは言えない。それに加えて、機織りの衰退も大きく関係していたように思われる[15]。こうした直

接の原因以外に、歴史的社会的背景として漁村では近世以来女は男が捕った魚を行商して売り歩くのがあたりまえであったという事実があり、それゆえ女が毒消し売りの行商に出て行くことに心理的抵抗が少なかったということもある。

前浜さんは小学校卒業後すぐには毒消し売りに出られなかった。それは田畑の仕事が多く、出たくとも出られなかったのである。彼女が早く毒消し売りに出たいと思っていたのは、毒消しに出れば友だちと一緒にいられて楽しいからである。そうしてみると、主観的には毒消し売りは家のために強制的にやらせられたわけではなく、むしろみんなと一緒にいて楽しいからこそ出かけていたことが分かる。このように前浜さんの場合は、多少とも毒消し売りに出る年齢が遅くなると、主観的には早く出たいという思いを持って毒消しに出ていることが知られる。なぜならば、前浜さんとは対照的に、以前取り上げた加藤さんは、「3度の飯が2度でもいいから、これ（毒消しの行商）したくねえなあ」と述べていたが、加藤さんの場合は小学校卒業後すぐに出たために、毒消し売りに出たくないという気持ちが強かったのである。毒消し売りに対する二人の感じ方の相違は、出かける時の条件の相違に基づいていると考えられる。

このほか、農業に関するもので注目されることは、田植について、「明日は皐月でね、手伝ってもらいたいんだけども」と言って、村内に限らず松野尾など村外を歩いて、田植の手伝いにきてくれる人を集めていたことである。これは、本分家関係や親戚に限らず、都合のいい人どうしで村を超えて田植や稲刈りをおこなっていたことを物語っている。すなわち、農業の生産関係が村落内で自己完結せずに周囲の村々とつながっている。こうした周囲の村との関係は、既に明治の文書に村有地の小作人に周囲の村人がたくさんいることから、明治以前から既にあったのではないかと思われる。また、刈り取った籾米は蔵にしまって置いて、「八月挽き」と言って8月に機械で取っておいた籾米を挽いて売っていた。このように、農村のなかでも米の売買が村内や周囲の村人に対しておこなわれていることは注目される。まして、8月に農家自体が籾米を精米して販売していたことは、これまで指摘されることが少なかっただけに、ここではあえて取り上げたしだいである。

さて、ここで前浜さんの毒消し売りの経緯についてまとめてみよう。彼女は、小学生の時から兄弟姉妹の子守をしていたが、小学校卒業後も田畑の手伝いなどがあってなかなか家を離れるわけにいかず、17歳になって初めて東京に毒消し売りに出ている。前浜さんは明治40年生まれだから、17歳というと大正12年頃に初めて毒消しに出たことになる。始めは上越線がなく、信越線で東京に行商に出ていたと言うから、この当時、上越線がまだできていなかったことが分かる。毒消しの行商においては、身体が小さいのでかわいそうに思って毒消し（薬）を買ってくれるお客さんが多かったようである。

それから、冬場には姉の嫁ぎ先に毒消し（薬）の袋入れを手伝いに行っている。薬の袋入れは小遣い稼ぎになった。この場合、母親の姉妹が本家に嫁いでいると述べているように、分家の女性が本家の家に手伝いに行ったと考えるより、姉妹が兄弟姉妹の家に手伝いに行ったと考

えたほうがよいと思われる。

その後、結婚してから横須賀、仙台と移って、角田に戻ってきた。仙台の時には、イワシを売って歩いて生計の足しにしていたが、それには毒消し売りの経験が役だったと言える。毒消し売りに再び出るようになったのは角田に戻ってからであるが、夫が働かなかったので彼女が毒消し売りに出て家を支えなければならなかったからである。毒消し売りに出始めた時は、長岡や新発田など新潟県内を歩いたが、それは一時的なものでしかなく、冬は暖かい水戸の太田を中心にその後歩くようになった。

彼女が夫と一緒に仙台から角田に戻ってきた時には、既に両親は亡くなっていたが、彼女の実家の作業小屋を修理して住み始める。疎開で角田に戻って来たさいに、実家の小屋に仮住まいしている様子は、前に取り上げた加藤さんの場合にも見られたが、疎開して戻って来た多くの人が同じような居住環境にあったことが分かる。ところで、角田に住むにあたって土地などの分与についてお聞きしたさい、彼女は「何もかにも、覚えていないのもあります」とさりげなく述べていたが、その言葉の背後に家制度による家産の長男単独相続の存在を読み取ることもあながち間違いとは言えないであろう。つまり、両親も亡くなり、長男が既に家の跡を取っていたため、角田に戻って来ても両親の庇護を受けることができなかったのではないかと思われる。彼女の言葉は、そうした事情を言外に語っているように思われる。

前浜さんはカケについて触れて、「はぃ 24、5になればね、カケなんか言ってられません」と言っているが、村内であれば25歳でもカケがあったわけだから実際にはそうではない。前浜さんのように村外の人と結婚した場合には、カケをしていられなかったと考えられる。このほかには、彼女の話しからイエの側面として実家にはオジ（父親の兄弟）が一緒に住んでいたことが知られる。また、村の共有地に家を建てて実家での小屋住まいから移り住んだのは、先に取り上げた加藤さんの場合と同様である。

東京の下谷での宿の様子については、前浜さんが語ったことではないが、別の人が詳細に語っているので下谷での宿の生活について記しておこう。

戦前の東京での宿は、着いた始めに米屋に立ち寄って1年分をまとめて買い、宿を紹介してもらった。戦前の宿は下谷とは限らず、浅草などにも分散していた。戦後は、吉田町の小林開益堂さんが下谷に家を購入したので、そこの1階に薬を置き、2階に売り子を住まわせていた。戦後、東京に宿をとっていた角田浜の人々は決まって下谷に泊まっていた。下谷以外には、千束町（センゾクマチ）、入谷（イリヤ）、竜泉寺（リュウセンジ）、三ノ輪（ミノワ）、浅草などに角田浜、越前浜、五ケ浜の人々は主に住んでいた。四ツ郷屋の人は、ワカメやコンブなどの乾物を扱っていたので向島に宿をとっていた。このインフォーマントがいた宿は、3人住まいの6畳の部屋が5つと2人住まいの4畳半の部屋が1つあり、合計17―18人が一緒に住んでいた。ここに売り子は家賃を支払って住んでいたのである。

大正期の頃は、下谷はよそから東京に流入してくる人々が住みついた貧窟街の一つであっ

た[16]。毒消し売りの女性はそうした地区に住みながら明治、大正から昭和30年代にかけて下谷を中心に東京中を「毒消しはいらんかね」と鳴って歩いていたのである。男が出勤した後の方が売れるので、毎日10時頃に出かけ、お昼には持っていったお弁当を食べ、夕方には宿に戻ってきた。家の主婦との間で薬の売買がおこなわれており、そのことからしても女性が薬を売って歩いたほうが都合よかったのである。始め同じ方向の人が4―5人連れだって電車に乗り、その後2人くらいに分かれ売って歩いた。薬のほかに、日本橋の問屋から仕入れた呉服を持参して売った。薬代が払えない家では、毎月25日頃がサラリーマンの給料日だったので、「その頃来なさいよ」と言われた。稼いだお金はなるたけ懐に入れておかずに、前借りした借金の返済に随時充てたり、宿の1階に薬などの商品が置かれていたので、お金ができたその都度薬を購入しておいて、現金をなるべく所持しないようにしたのである。

東京での毒消し売りは、ほかの地域と違って、「お得意さん」が少なくどこへでも出かけて行った。「東京は、どこも行かん所ありません」と言っているのはこうしたことを示している。この売り方は、東京とほかとでは異なっていたことを示している。前浜さん自身茨城では「お得意さん」を持っていて、そこを回って売り歩いている。こうした事実は、東京がこの当時既に大都市になっていてサラリーマンが多く、ほかの町や農村とは異なって、東京に住んでいる多くの人々と行商をする者との間に信頼関係を築くことが困難になっている様子を窺い知ることができる。つまり、東京では行商の売買行為がもはや信頼関係の上に成立しているのではなく、金銭上の取引関係になっていることを示唆している。

先のインフォーマントの場合、10月の秋祭りの前に帰るのではなく、8月末には稲刈りで女手が必要なためほかの人よりも早く「くに」に帰っていた。そうしたことは、田んぼを比較的持っている家ではどこの家でもそうであった。そうして、秋祭りが終わると再び行商に出て行った。こうしたことは、田んぼを持っている家と持っていない家とでは、毒消しの行商の生活サイクルが異なっていることを意味している。春秋の彼岸の時には、築地の本願寺や浅草の観音様で朝顔市やホウヅキ市、成田の浅草寺などに浴衣を着て連れだって出かけて行った。1年を通して行商を休むことは、この彼岸を除いてめったになかったのである。黒のシャの羽織（下は紬で、それをセルと言った）を来て行ったが、その頃はそれが流行っていた。

乳飲み子がいるために子供を角田に置いておくことができず、子供を連れて毒消し売りに行かなければならなかった時には、宿の近くの長屋のおばさんに面倒を見てもらった。先のインフォーマントの場合、その子守をしてくれたおばさんとは年賀状のやりとりをしているし、その後角田に遊びにも来ている。こうしたことは、これまで見てきた毒消し売りの人の場合にも、「お得意さん」との間でしばしば見られたことである。

さて、前浜さん個人の話に戻すことにしよう。彼女は毒消し売りの行商をしていた時のことを懐かしく思い出している。水戸黄門のお墓を見に行くのに、お得意さんが仕事を休んで付いて来てくれたこと、宿をお願いすると決まってただで泊めてくれたことなどに触れ、「どこに

行ってもね、良くして貰いました」と感慨深く語っている。前浜さん自身は行商してきてよかったという言葉こそ語っていないが、毒消しをしてきて良かったという思いは、前述したように、控えめな表現ながら知ることができる。

彼女の毒消し売りの特徴は、彼女の長男が毒消しをこそ売ってはいないが、金物を売って歩き、母親の世話をしながら一緒に宿をとっていたことである。このほかには、病気の妻に代わって夫が毒消しを売り歩いた例がひとつあるが、息子が母親と一緒に宿を取って行商していたのは、このほかには聞かれなかった。行商してきた人が病気になった話は、何人かの人から聞くことができたが、この場合は母親がバセドー病にかかったために、付き添いを兼ねて息子が一緒に売り歩いたのである。そして、長男の人が「親孝行さしてくれ」と言って、母親に創価学会に入ることを勧めている。病気の母親の世話をするために一緒に行商生活をしたり、新興宗教への入信の動機が「親孝行」であったりと、前浜さんの息子は親孝行の気持ちを強く抱いていることが分かる。こうした親孝行の道徳は、かつての家制度では強く求められていたものであるが、子供もまたそれが「あたりまえ」であると受けとめていたのである。

息子が創価学会に入るようになった背景には、彼の経験した「不幸な」出来事がある。それは、皇居の巡査のところにお酒を一升持っていかなかったばかりに巡査に採用されなかったことである。お話しを聞いている間でも、彼女がこの話題を繰り返し触れていたことに、息子ばかりでなく母親にとってもいかに人生において重大な出来事であったのかを伺い知ることができる。合格していながらお酒を持っていかなかったという理由だけで就職に失敗した経験は、言わく言い難い、きわめて大きな精神的ショックだったのではないだろうか。それに加えて、母親の実家の兄と父親が仕事もせずに大酒飲みで遊んでばかりいたことなど、家庭を取り巻く環境が悪いため、心が不安定で絶えず満たされない状態、つまり「心的孤立の状況」にあり、こうした状態が前浜さん家族を新興宗教に走らせた原因であると言えるのではないだろうか[17]。

現在、村には創価学会に加入している家が4軒あるが、創価学会に入っている家はどの家も、村の氏神神社にお参りにいっていないし、また村の祭典費を支払っていない。村の神社祭祀は村人が全員で負担して賄うというかつての状況が、もはや解体されていることを知ることができる。

ところで、夫に対する不平不満こそ贅言されていないが、「随分苦労しました」という婉曲的な言い方でさりげなく、夫に対する評価を彼女は述べている。男は貧しい家であっても働かないが、女はそれに耐えつつもくもくと働いて家を支えている姿が映し出される。彼女自身「ほんとに、ずして（ずるして）うちにいることが出来なかった」と述べている言葉が、それを端的に示している。このように、男は貧しいにもかかわらず酒ばかり飲んで働かなかったのは全国的に見られたことであるが、こうしたことが可能だったのは、村上信彦も指摘しているように、当時は男中心の家制度のイデオロギーが社会的に支配的であったがゆえにである[18]。

彼女は、夫は手に職がなく年を取ってから角田に移って来たため仕事になじめず、酒に浸る生活を余儀なくしたのであろうと考えている。夫に対する彼女の意見を聞いていると、彼女が感情に流されることなく、実に冷静に物事を見つめる目を持っていることが分かる。実際、当時、仙台での生活をあきらめて妻の田舎に戻ってきても思うような仕事はなく、まして知り合いも少ないこともあって、精神的ストレスが強かったことは想像に難くない。そうして、「不幸な」家庭環境にあって、子供たちが宗教に生き甲斐を求めたと言えるのではないだろうか。末の子供が高校生の時に創価学会に入信したのも、家庭を取り巻く「不幸な」環境が背景にあったことが考えられる。

しかしながら、前浜さんが必ずしも「不幸な」人生を送ったとは誰にも言えない。なぜならば、幸不幸を決めるのは彼女自身だからである。インタビュー中に前浜さんはよく笑われていたが、彼女の笑顔が、自分の人生をあるがままに受けとめられるようになったことを示している。そして、なによりもこうした笑顔は、現在の人生に満足していることを物語っている。現在は末の息子と同居し、「ほんとうにいい嫁に来てもらった」からこそ、いままでの人生を振り返って笑っているのである。

(付記)

聞き取りは1994年度新潟大学人文学部社会学実習Ⅱの一環としておこなった。当日の参加者は高山健一君と筆者であった。その後、分からない箇所について再調査に行ったが、施設に入所していたために、聞き取り調査を十分にはできなかった。最後に、調査に御協力いただいてきた区長小川敏夫氏と前浜ミエさんに御礼を申し上げたい。

注

1) アナール学派に関しては、こんにちたくさんの書物が出版されている。ここでは、ジャック・ルゴフほか『歴史・文化・表象』(岩波書店、1992年)、福井憲彦『「新しい歴史学」とは何か』(日本エディタースクール出版部、1988年) などを挙げておくにとどめる。なお、これまでの事件史中心の伝統的歴史学を批判し、社会史の意義を指摘したものには中井信彦「史学としての社会史」(『思想』No. 663、1979年) などがある。

2) 村上信彦、伊藤康子、米田千代子いずれの論文も、古田ゆき子編集・解説『資料　女性史論争』(ドメス出版、1991年) に所収されている。

3) 中村尚司はこうした研究として民際学を唱えている(『人びとのアジア』岩波新書、1995年、194ページ)。

4) 毒消し売りの歴史を書いた代表的なものに、小村弋『越後の毒消し』(巻町双書8、1963年) がある。そのほかには、山添真一編『かくみ浦』(自費出版、昭和53年) や佐藤元重「第3章　越後の『毒消し売り』」(『新潟に生きる』、北越書館、昭和48年) などがある。それに対して、毒消し売りをしてきた当の人から聞き取りをしてまとめたものに、大原八重子「母と毒消し売り」(新潟女性史研究会『竈のうた』考古堂、1981年) がある。

5) 研究方法として生活史法を検討したものに、中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』(新曜社、

1995）などがある。

6）本研究の問題意識は拙稿を参考されたい（「毒消し売りの生活史（1）」『環日本海地域比較史研究』3号、1994年）。なお、被調査者の氏名は仮名である。また、文脈上分かりにくい所および方言は随時（　）で補足した。

7）ヒヤフという言葉の内容については、ほかの村人もその言葉を知らなかったし、当人の言うところではヒヤフもミナモシマエも前浜さん個人の造語である。

8）近世年間において大滝は庄屋ではなく、組頭を担当してきている。

9）実際にはアミモトが3つ取って、残りをカクノヒト（カコ）が平等に分けている（斎藤順作『村・家・人』巻町双書16、昭和46年、26ページ）。

10）カケとは、仮祝言をあげていてまだ祝言はあげていない間のことを指す方言である。カケの間は、嫁ぎ先ではなく、実家に稼いだお金を入れる。こうした習慣は、漁家の場合全国的に比較的多く見られたものである。

11）これは名古屋台風ではなく、昭和34年の伊勢湾台風のことであろうと思われる。

12）玉野井麻利子「抵抗としての子守唄 ― 近代日本における国家建設と子守のサブ・カルチャーについて ―」（脇田晴子・S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史　下』東京大学出版会、1995年）を参照されたい。

13）女が魚を在方に売っているという記述は、1805（文化5）年の「村明細帳」に初出するが（亀井功・佐藤和男『角田浜村の歴史』巻町双書32、昭和59年、127ページ）、実際には記載されていないだけで、それ以前からもおこなわれていたことは確かであろう。

14）小村、前掲書、10ページ、17ページを参照されたい。

15）山添滝次郎は、自分の祖母の場合を例にして機織の衰退が女を毒消しにかりたてた背景にあることを指摘している（「角海浜歴史展望」『たよりうらはま』第5号、昭和38年6月30日）。

16）明治時代の下谷の様子については、斎藤兼次郎「下谷万年町　貧民窟の状態」など中川清編『明治東京下層生活誌』（岩波文庫、1994年）所収の諸論考、および小浜ふみ子「下町地域における町内社会の担い手層」（『社会学評論』、182号、1995年）などを参照されたい。

17）鈴木広は1962年に実施した福岡市の創価学会の調査から、会員は都市化と落層化によって家族などの機能が弱体化したことによって、心的孤立の状況に陥り、折伏の過程などを通して心的統合を回復していることなどを明らかにしている（『都市的世界』誠信書房、1970年）。

18）村上信彦「女性史研究の課題と展望」（『高群逸枝と柳田國男』、大和書房、1977年、217ページ）を参照されたい。